

# 中国情報

雄嶺 嶋中

中国がいまや一つの歴史的時代の終りに近づきつつあり、「毛沢東以後」の時代へ向けての歴史的行期にあることは、もはや誰の目にも明らかなくところである。先の十全大会もこつした状況のもとで開かれたが、問題は、こつしたプロセスのなかで、毛沢東自身がどのような役割りを演じているか、にある。

そこでまず、十全大会では毛沢東はなにをしただかを確認して

## 「非毛化」への周戦略

### 不自然な毛私信採用

一方、林彪批判の一環として個人崇拜、天才論、先驗論などが否定されてきた潮流を反映し、大会の基調整理でも、改正された規約でも毛沢東個人の言が大幅に削除された。

こつした規程は、明らかに毛沢東個人の役割りを相対化しようとする潮流のあらわれであるだけに、この場合、従来の個人崇拜的色彩を一掃して、場面を正常化しようとしたものと受け単純にとらえてよいものであるかごつつか、大いに疑問の残るところである。

裂してはならない、公明正大であって陰謀術策をめぐらしてはならない」とや「前途は明るいが、道は曲りくねっている」などの基調スローガンの多くが「毛主席の各地巡視期間における各地責任者同志との談話紀要」や「毛沢東の江青への書簡」など毛沢東の私的な、もしくは非公開の談話から採られていることである(因みに宛宛総論綱は、こつしてすべからず、毛沢東録録、をうなぎあわせたものになっている)。

この点では、いかに毛沢東といえども、非公開の談話や妻へ宛てた私信のなかの一節が党大会の基調報告や党規約総綱のなかにそのまゝ採用されているこの不自然さを指摘すべからぬであろう。しかしこ

おこつ。九全大会では開会冒頭「きわめて重要な演説をおこなったり、大会

この疑問を解くカギのこつは、王英文の常規糾改正報告が、こつした毛沢東個人の名の削除にかんして、まったく「コメント」であったことであり(八全大会の郵小平報告はこの点を詳く触れていた)、この事実が、前々回のこの標で指摘した王英文報告が含深深刻なナンとも関連している。

これはむしろかすると、実質的に「非毛化」をすすめるこつ、名目的には毛沢東の言葉を採用して毛沢東の権威への挑戦と解されるリスクを避け、いずれの日にか、家長長的な党の私物化を批判する際のために周到に配慮された周恩来の渾大な戦略の一環であるのかもしれない。

期間中にも「重要な人ひとの心をふるわしたせざる演説をおこなったりした(いずれも当時の新聞公報による)毛沢東であったが、今回は、「代表たちに親しく手をあつてあいさつした」(十全大会新聞公報)にすぎなかったようだ。つまり、きわめて象徴的な役割りしか演じなかつたのである。

二つ目のカギは、毛沢東個人の言は聞かれながら、十全大会の基調スローガンである「三要三不要」の原則(「マルクス主義をやるのであつて修正主義をやつてはならない、團結するであつて分

たごすれば、前回指摘したように、毛沢東にとっては望ましくない内容を含む「五七一工程」約束が今日、広く流布されている事実とこれは表裏を成すことでもあるのである。

(東京外大助教授)